

ICT活用した教育環境整備

昭和薬大 薬を通して人類に貢献



理事長 渡部 一宏氏に聞く

5月に昭和薬科大学の理事長に同大臨床薬学教育研究センターの渡部一宏教授が就任した。病院薬剤師として12年間勤務した臨床実務経験から、チーム医療や多職種連携の重要性を学べる教育環境を整え、地域社会の一員である医療系大学とし

VR用いて実習や演習強化も

―理事長就任の抱負を。

大学教員だけでなく、人役員も務めてきたが、薬学教育、薬剤師の人材養成のあり方が変化してきている中、大学が今まで実施してきたことを継承するだけでなく、常に社会が求めることにキャッチアップして新しいことにチャレンジする大学にしていきたい。

18歳人口が減り続け、薬学部志願者数も減少し、将来的に薬剤師の供給過剰が予測されるなど、薬科大学を取り巻く環境は大変厳しい。私立の薬科大学として次世代に残るには、大学の価値・ブランドを確立することが重要だ。

「昭和薬科大学、附属校だから入りたい」と思ってもらえる魅力が強く発信していくことが大切だ。まずは、昭和薬科大学、附属校に入学した全ての学生・生徒が卒業時に「この学校で6年間の生活を送って良かった」と感じてもらえることが大学の価値を確立するための最重要課題と考えている。

―今年度は2020年度から5年間の中期計画の中間年に当たる。取り組んでいきたい具体的な事業は。

中期計画では教育、研究、地域貢献・連携、法人関連、附属校関連の方向性を示しているが、今まで進めてきたことを振り返った上で次のアクションを取りたい。コロナ禍の3年間で、大学と附属校ではICTを活用した教育の重要性を学んだので、ICTのノウハウをさらに蓄積していく必要があると考えている。

本学ではコロナ禍以前から、録画された講義を自宅で学習できるシステムや、学習支援として電子媒体の資料を学生と共有できるシステムを導入していたが、全ての学生・教員が利用していたわけではなかった。コロナ禍で、学生や教員もこれら既存のシステムをフル活用し、資料の共有、

e-ラーニングによる小テスト、レポート提出等を実施している。

大学の講義でも、レジュメを配布するよりも、タブレットで閲覧できる電子媒体の配布を希望する学生が急速に増えており、明らかにICTに関するスキルが向上していると感じる。また、経営面でもペーパーレス化等に取り組んでいく必要がある。

中期計画では「ICT環境の整備」は記載されていたが、VR(仮想現実)の活用に関する記載はなかった。文部科学省の補助金事業「ウィズコロナ時代の新たな医療に活用し、資料の共有、

成」に採択されたVRゴーグルを用いた実習や演習を強化していき、臨床現場で実際に行われていた薬剤師の手法を体験できることを次のステップとしている。

―附属校においても、ICTを活用した教育を取り入れ、電子黒板やタブレットを導入した教育環境を整えたい。

他方で、学生同士がコミュニケーションを図り、時間をかけて物事を考える仕掛けであるアクティブラーニングやディスカッションなども教育においては大切だと考えている。

―薬学、薬局、薬剤師を取り巻く環境の変化をどう捉えているか。

国が示した「患者のための薬局ビジョン」では、薬剤師業務を対物から対人にシフトする方針を打ち出している。対人業務がより重視されるようになったことを日頃から臨床系の教員として学生に伝えていく必要があると考えている。

―附属校の所在地である沖縄県との関係は。

薬剤師の地域偏在は全国的な課題だが、沖縄県も例外ではない。対策として、県内の国立大学に薬学部が新設される話が進んでいるが、開設されても薬剤師の輩出までさらに6年先まで待つ必要がある、また先の話だ。

そのために、沖縄県薬剤師会からUターン・Iターン就職に関する個別説明会を持ちかけられ、2月に実施した。説明会では、沖縄には薬剤師不足という課題がある一方、薬剤師として地元で働く魅力も説明し、沖縄出身の学生には可能であれば地元沖縄に就職することも選択肢として持っていてほしいと伝えた。

学生の反応も好感と捉えているので、将来的には附属校の生徒にも同様の取り組みを行い、高校生の段階から地元で医療職として就職することの選択肢を十分に考えられる環境づくりを薬剤師会と検討している。

―自分生まれ育った地域の医療を守ることも医療人である薬剤師のプロフェッションナリズムの一つだと思う。学生には選択肢の一つとして考えてほしい。

チーム医療の大切さ学ぶ場に

―求められる人材の養成に向けて取り組むこと。

―薬剤師養成が薬科大学の命題だが、薬剤師としてのキャリア形成や多職種連携が大きなウェイトを占め、力強く進めてきた。

―薬剤師として目指す進路を自ら考え、希望する進路に大学として背中を押してあげることができるとキャリア形成や就職支援を行ってきた。薬剤師の職種は薬局や病院といった臨床現場だけでなく、製薬企業、公務員、アカデミアなど多岐にわたる。製薬企業では薬剤師としてのメディカルサイエンスリエン(MSL)の役割が重視され、行政

はコロナ禍で公衆衛生における薬剤師の役割に再注目し始めている。しかし、多くの学生が持つ薬剤師業務のイメージは臨床現場が大きなウェイトを占めるのも現実だ。薬剤師として何をやるために薬局に勤めるのか、なぜ製薬企業に入りたいのか、病院薬剤師になるならそこで何をしたいのかをきちんと考え、自らの薬剤師像を決められる学生を多く輩出したい。

国民、社会が求める医療人としての薬剤師養成のために次世代の薬剤師、薬学教育のあり方を考える重要な時期と捉えているが、単科大学として薬学部だけで医療を考えることは不可能だ。私

自身が聖路加国際病院の病院薬剤師としてチーム医療の重要性を経験し、十分に理解している。近年は多職種連携教育の充実を図ってきた。聖マリヤンナ医科大学、東海大学、杏林大学等の医学生や看護学生との連携で学生時代からチーム医療の大切さを学び、卒業してからもこのことが大事だ。新しい薬学に対応できるように、これからも多職種連携に関する学びをサポートしていきたい。

―地域社会との関わりは。

本学は創立90周年を機に、地域の課題解決等に取組む「地域連携センター」を立ち上げ、町田市と連携を組んで地域に

おける学生の学び、地域活性化、住民の健康への貢献、生涯教育の強化に取り組んできた。市、住民、薬剤師会と共に活動してきたことで、大学も地域社会に根ざしていることを再確認できる良い機会となった。

町田市も含めた多摩地域は高度経済成長期に団地が造成されて多くの家族が入居したが、子供は独立し、高齢化が進んでいることが課題だ。地域連携センターが主となり、この課題に本学ができることを考え、市や東京都住宅供給公社等と協定を結んで学生を団地に居住させ、自治会が行う活動に協力し、地域住民との交流を深めた功績は大きいと考えている。

町田市の医療系大学は本学しかない。今後、新

製薬企業、医薬品卸売業、医療機器メーカー、病院経営、医療コンサルティングなどに役立つ DPC病院の実力を知るデータの決定版!

【ダウンロード販売】

DPC施設 疾患別患者動態 2023年版

■制作・著作：株式会社エムシンク
■販売形態：ダウンロード形式
■仕様：Excel, Word
■価格：198,000円(180,000円+税)

主な収録内容

■疾患別/手術あり・なし別 患者動態表

医療機関別に疾患ごとの患者数の増減や前年比がわかる。疾患ごとの症例数(処方件数)も把握できる。

■疾患別 患者動態 5年間推移 作成用ソフト

同じ医療圏内の病院における疾患ごとの患者の増減が見える。他の施設との比較や地域内の患者の流れがわかる。

■機能評価係数Ⅱ, 地域医療指数 作成用ソフト

病院の取り組み状況を全国平均や近隣病院と比較できる。

まずはサンプルをダウンロードして内容をご確認下さい⇒

<https://yakuji-shop.jp/>

または

薬事日報社 ショップ

検索